

令和6年度 日本精神科医学会学術教育研修会 報告

看護部門

遠藤 謙二 武田 龍太郎

今年度は令和6年6月1日（土）～2日（日）の2日間にわたり、川崎日航ホテルにおいて開催された。今回は、「問題解決のヒントと知っておくべきことと自分のこと～看護師であることを誇りに健やかな毎日を～」というテーマで、全国から144名の方々が参加した。

第1日目は、昨今の人材（特に看護師等看護職）不足に対して、二つの講義があった。講義1は、「看護師確保に悩まない効果的な求人方法のヒント～紹介業者に頼る看護確保は卒業しよう」という演題で、一般社団法人 看護職の採用と定着を考える会 代表理事の早田真二先生にお話をいただいた。早田先生は、以前、人材紹介会社に勤務された時に人材紹介先の病院に大きな負担となる契約料を徴収するシステムに疑問を感じ、現在の法人を数名で立ち上げられた。その後の経験のお話から、各病院が広報の際に、案内パンフレットやホームページに記載する内容を工夫すること、スタッフが病院の問題としてではなく自分事として捉え、入職検討者が見学に訪れた際にも職員が力をあわせて魅力を伝えることなどにより、応募者、採用者が増加したという事例を紹介され、採用に対する工夫、努力、熱意が課題解決に重要であることを強調された。採用面接の際にも病院側の面接者（管理職等）が自分らしさを表現することが、最近の若い世代の応募者には受け入れられているというお話が印象的であった。

講義2は、「看護職離職に悩まない効果的な対応のヒント」というテーマで、医療法人社団福寿会 藤野恭子看護部長からお話をいただいた。自分自身の強みを知ること、人間関係のストレスなどを感じた時は、早期に相談する体制・雰囲気が



重要であることを教えていただいた。そして、それには非言語的コミュニケーションが重要となり、職場の雰囲気明るくして、お互いの信頼関係を高め、個としての一人ひとりを生かし、その方自身のあり方を職場で承認していき、各職員が仕事にやりがいを感じてもらうことが、結果的に離職予防につながると述べた。

講義3は、日精協指定弁護士である二番町法律事務所の島戸圭輔弁護士から「看護師が知っておくべき医療事故の原因と事故後の対応について」のお話をいただいた。最初に日精協医療安全委員会で審議された多くの詳細な統計データから、事例の多かった自殺、他害行為、転倒、誤嚥、身体的拘束それぞれの注意点と実際の裁判事例を詳細に示していただいた。事故が生じた時には、早急に当事者本人および家族に丁寧な説明を行い、誠意をもって真摯に対応していることを理解していただくことが重要であること、こちらが患者のためにと考えてとった行動があだになりやすいことも教えていただいた。昨今は患者や家族の権利意識が高まり、問題が発生するとSNS等で一気に拡散してしまい、結果的に大きな損害が生じるリスクを改めて強調された。各事故への丁寧な対応・防止および安全管理については、職員一人ひとりが注意すること以上に病院全体での安全管理体制を整え、病院としての日々の工夫が重要であることを教えていただいた。

講義4は、「看護師が知っておくべき医療DXとその周辺のこと～医療DXの見方と医療DXを味方に～」というテーマで、EXSEEDS医療

ICT コーディネーターの中原真悟氏から、マイナンバーカードの保険証利用などを含めた医療DXの動向を教えていただいた。病院にとってICTの導入の主目的は効率改善にあるのではなく、ICT導入により生じた時間を患者と直接接する機会や時間を増やすためとお話しされた。この講義からは、医療DXはあくまでも病院業務を補佐する手段であることを認識し、その先にある患者一人ひとりを尊重した質の高い医療につながる実践であるべきことを教えていただき、今後はICTの発展がこのような視点でスムーズに医療現場に導入されることを願うばかりであった。

講義5は、株式会社J-Laboの高梨洋子氏が、「看護師が知っておくべき接遇／マナー術～あななのしぐさで相手はHappyに～」とのテーマで、大変親しみやすい語り口でお話しされた。隣の席の参加者同士で対話を促され、お互いの方への肯定的なメッセージや笑顔を引き出され、クイズ形式で会場とコミュニケーションをとりながらの講義となった。「歓迎されたい」「独占したい」「優越を感じたい」「真似したい」「損をしたくない」「自分本位に考えたい」という六つの人間の心理を説明され、相手の心理をくみとりながら、笑顔と視線、温かな言葉掛け、洗練された立ち居振る舞いを同時に実践することが相手に安心感を与えることにつながると教えていただいた。

以上で初日の研修は終了した。場所を移し、各地から集まった参加者と講師の先生たちが交流を深め、情報交換をしながら懇談し、散会となった。

研修会2日目は、当協会・山崎學會長から、「精神科医療を取り巻く環境の変化」として、我が国における精神保健福祉行政の歩みについて、当時の新聞記事や写真などを供覧しながら詳しく解説され、我が国の民間精神科病院が国の要請によって急増してきた歴史や、現在の我が国の精神科病床は、諸外国の居住施設相当の機能を持つ病床も多く、それらを計算すると決して多くはないことを強調された。そして精神医療の将来像として、増加の一途の社会保障費、海外に比べ極端に低い精神医療の単価、精神病床の利用率低下など、混

沌とした状況であるが、課題解決に向けて協会として取り組んでいく決意を表明された。

講義6は、「看護師が知っておくべき嚥下調整食の基本」として鹿児島市医師会病院・松尾晴代看護部主任からのお話があり、摂食・嚥下の各段階について、解剖学的な図とともに摂食・嚥下に至る各段階における嚥下障害の症状や対処法が詳細に示された。窒息時の対処法では、手による食物など誤嚥物質のかきだしと吸引が基本であり、遭遇した場面での救急対応の準備・練習の重要性が指摘された。日本摂食嚥下リハビリテーション学会学会基準による嚥下調整食分類を解説していただき、各病院での嚥下調整食のマニュアルの整備の必要性が指摘された。そして、患者対応の基本は、実際の食事場面での患者の観察であり、実際の臨床現場での誤嚥や窒息防止の目的で個別に細かく観察して、丁寧に対処していく必要性を教えていただいた。

最後の講義7は、「自分のからだと上手に付き合おう」という題で、株式会社タニタ開発部主席研究員・西澤美幸氏から、体組成計開発の歴史に続き、脂肪、筋肉、骨組織などの比率が個人の健康度に大きく影響し、脂肪が多い肥満が特にフレイルや皮膚疾患、糖代謝異常などの要因になりやすいことが説明された。日常で実践可能な、体組成も意識しながらの軽い運動や呼吸法の実践練習を参加者全員で行い、患者や職員の健康管理を十分意識することがワークライフバランスを保ち、心身の健康維持につながることを教えていただいた。

講義終了後には閉講式が行われ、各参加者に終了証書が授与された。1日半にわたり、昨今の医療現場の人材不足、早期離職、医療事故後の対応、医療DX、接遇、精神医療の現状、嚥下障害への対策、日常からの健康管理といった、いずれも現場で困っている広範囲にわたる主要な課題に、参加者の方々は真剣なまなざしで講師、会長のお話に聞き入っておられ、充実した研修会となった。

(日本精神科医学会
学術教育推進制度学術研修分科会)